## *ムル国立公園（無数の洞窟と蝙蝠の大飛翔）*

ムル国立公園はインドネシアとの国境近くのムル山を中心とした熱帯雨林の中にある一大洞窟群が有名である。世界自然遺産に指定されているので、サラワーク州では最も観光客に人気のある国立公園であるが交通の利便性は良くない。面積は 52,688ha の広大な公園になっている。

ミリから小型機に乗って行くことになる。途中までバスに乗り、そこから船で川を遡る方法もあるが、船だけでかなり時間がかかるので、丸一日がつぶれるし交通費もかえって高く付く。

通常は航空機を利用することになるが、ムルの飛行場が狭いので、19 人乗りの小型プロペラ機しか飛べない。しかも天候が悪いとすぐ欠航となる。場合によっては数日もミリのホテルでの待機を覚悟する必要がある。タイトなスケジュールの中で行くには現地の情報を良く調べる必要がある。

私が訪れた時も 1 時間遅の出発だった。約 30 分のフライトでムルの空港に着く。

（写真 48 右）ムル空港と小型飛行機。

観光客が泊まれるようなホテルはリゾート風のものが一軒有るだけだ。土をローラーで固めただけの発着場に降り立ち、鉄道の地方無人駅くらいの大きさしかないターミナルに行くと、ホテルの送迎車が待っている。

送迎車といってもジープなので人数が乗れない。小さな飛行機でも乗ってきた人は観光客なので、２台のジープでピストンされることになる。幸いホテルは近いので、それほど待つ必要もない。観光のインフラが整っていないが、それがかえって秘境に来た気持ちにさせてくれる。

（写真 49 上）ホテルの宿泊棟。
ホテルには数棟散在している。

このホテル、ローヤル・ムル・リゾートホテルは全体が木造高床式になっている。食堂のある本館と宿泊棟は離れているが、すべて木道で繋がっている。大きな広場もあって、規模は大きい。

通常であれば、観光客はここに４～５日間滞在して、ホテルの前から船に乗って川の上流に足を延ばし、熱帯雨林をトレッキングして、様々な洞窟を見学することになっている。私の場合、二日間の滞在だったので遠方までは行けなかったが効率を上げるために、地元のレンジャーに案内を頼んだ。

（写真 50 左）ホテル内の道路。

ホテルのフロントホールはオープンスペースになっていて、その前にメリナウ川が流れ、船着場がある。その向こうに大きな岩が有り、左右を見れば熱帯の森になっている。

このホテルでマレーシアの料理とフルーツを食べ、朝は鳥と猿の鳴き声を聞き、昼は船に乗って熱帯雨林のトレッキングをし、夜はラムベースのトロピカルカクテルを傾けながら、熱帯雨林に沈む夕日を愛で、蛍の飛び交うのを楽しむ。勿論、熱帯の花もあちらこちらで観察できる。こんな生活をすれば4〜5 日はすぐ経ってしまう。リゾートホテルは退屈させない様に出来ている。

フロントでチェックインの手続きをしている間に、ギャアー、ギャアーと赤ん坊が泣くような声が聞こえる。ロビーの隅に大きな蝉がいて、それが鳴いていた。ロビー自体がオープンになっているから蝉が居ても可笑しくない。羽根がミンミン蝉と同じ透明だが 18cm くらいの大きいものだ。

部屋は思ったよりも広い。ボーイが案内してくれるわけでもない。自分で荷物を運び、部屋に入るとまず点検する。水の出具合もそうだが、危険な虫が入っていないかが重要なのだ。都会のホテルではしないが自然に近い所に泊まった時には点検する慣わしになっている。いもり位はいてもかまわないが、毒蜘蛛のような毒虫にもぐりこまれていたんではかなわない。おみやげ売り場に行けばタランチェラや蠍の標本が売っている場所に来ているのだ。

点検して蝉の死骸を見つけた。さっきフロントで見たうるさいやつと同じ種だが少し小さい。

（写真 51 左）部屋で見つけた蝉の死骸。12cm 位。

**鍾乳洞の見学**

ここムル国立公園は洞窟の宝庫として有名である。1978 年から 5 回にわたって大規模な調査が行われたが、70 を超える洞窟を数えただけでまだその全貌をつかめていない。熱帯雨林の中にある、この公園の 60%くらいがまだ、前人未踏といわれている。

一般の観光者がいけるのはまたその極一部にすぎないが、それでもそのスケールの大きさと内容に驚嘆することになる。

公開されている洞窟は川沿いの岩壁にある。まずはホテル前の船着場から船に乗って上流に遡る。
熱帯雨林の中をクルージングして、大きな岩壁の前で船を着け、そこから木製の桟道を登ると洞窟の入り口に到着する。

（写真 52 左）ホテルの船着場。

（写真 53 右）ジャングルクルーズ。
途中の船着場

ウインドケーブとクリアウオーターケーブ：

公開されているムルの洞窟の見学には二種類ある。観光客に見せるためのショーケーブと探検目的のアドベンチャーケーブがあって、ショーケーブは中に照明がついていて、歩きやすいように道もついている。アドベンチャーケーブの方は、以前体験したことのある仲間に聞くと、照明がないだけでない。洞窟内でロッククライミングや水中歩行に狭い場所を通るという探検気分を味わえる所らしい。

この岩壁にはどちらもあるが、我々の見たのはショーケーブのほうだ。

まず「ウインドケーブ」を見学する。名前があらわすように、洞窟に入ると爽やかな風が心地よく、洞内を廻ると、鍾乳石と石筍がぎっしり詰まっている。その大きさと形状は日本では見られないものだ。

すぐ近くにもう一つ名前の知れている洞窟がある「クリアウオーターケーブ」だ。ここは岩壁に設置された桟道を奥に数分歩けば到着する。

（写真 54 左）小山のような石筍。

（写真 55 右）盛り上がった鍾乳石。

ここは全長 100km を超える、東南アジア最大、世界でも 7 番目に長い洞窟といわれている。ここも色んな形の鍾乳石と石筍があるので、それを見ながら岩の階段を降りていくと、そこに幅が 7～8mの川が音をたてて流れている。

洞窟の中に川があるので、この名が付いているが水は無色透明な清流である。奥に行けば滝もあるらしいが入り口近くの照明だけで、奥には行けないようになっていた。

以前にカリブ海のキューバで革命戦士のチェ・ゲバラが隠れ住んだ鍾乳洞を見たことがある。そこも洞窟内に川があり、船に乗って洞窟内から表の川まで航行したことがあるが、そこよりスケールが大きく、水量も多い。

デアケーブ：

何と言っても、この公園のハイライトはこの洞窟から大空に飛び立つ蝙蝠の大飛翔である。NHK の世界遺産や自然の番組でも何度も紹介されているので、ご存知の人もいるだろうが、映像でなく、現実にその現場で見ると生命の不思議と生きることの壮絶さに時間を忘れて見入ってしまう。

ここに行くにはホテルから熱帯雨林の中を 30 分位のトレッキングになる。案内してもらったレンジ

ャーは昆虫に詳しく、途中珍しいものを見つけると我々に教えてくれる。原色が美しい固有種のツノ虫、木の葉虫、全長が 50cm もある巨大なナナフシ。いずれも素人には見つけられない。緑濃い木の葉に隠れているのだ、場所を教えられても確認するまで時間がかかる。

彼らはどの樹にはどんな虫がいるか頭に入っている。我々だけでは飛び交う蝶類を見つけるのがせいぜいである。

（写真 56 左）木の葉を着ている様な虫だ。幹に止まっていたので、判ったが葉にいたのでは見つけられない。

（写真 57 右）蝶々。

森の中でカメレオンを見つけるが全身緑色に擬態していて、葉陰に隠れているので、双眼鏡で覗いて、ようやく確認できるくらいだ。

レンジャーの案内で歩くのは時間が倍もかかるが退屈しない。新しい発見があり、次の熱帯雨林に行ったときの歩き方の参考になる。

やがて、森の向こうに大きな岩山が見えてくる。谷間をぬって近くにいくと、岩壁に巨大な穴が開いているのが見える。

（写真 58 左）デアケーブの入り口の穴。
下に見える木製のテラスは観察台。

近くまで行くと、その大きさに驚嘆する。ジャンボジェットがゆうゆうと入れる大きさと言われている。

その入り口を入ると、そこは巨大なドームになっている。岩のドーム球場に入ったような感覚である。
ジャンボジェット機が 50 台も収容できるスペースがあると書いてあるパンフレットもあるくらいだ。

昔は鹿の群れが住んでいたので、この名前がついたと説明されるが、今は居ない。それに代わって無数の蝙蝠の住みかになっている。

入り口に近づいただけで強烈なアンモニア臭に見舞われる。眼もまともに開けられないくらいの刺激である。そこに蝙蝠の糞が人間の背丈くらいの小山になっている。そして、その糞にそれを食べている蛆虫が無数にた

かっているし、ねずみくらいの小動物もいる。気の弱い人はこれを見ただけで洞窟に入る気にならないだろう。

端に狭い道路がついている。浸水の雨だれが上から落ちてくるし、道はぬるぬるとしていて滑りやすい。こんな処で転倒したくない。滑らないように気をつけながら奥にいく。入り口が大きいので、照明はついていないが、奥まで光がはいる。

ここも鍾乳洞でいろんな形のものがある。リンカーンの横顔に似ていることから、その名がついている石筍もある。

岩の天井には蝙蝠が群がってぶら下がっている。人を襲うことはないが気持ちの良いものではない。岩を登り下りしてドームの周りを見ただけで、その臭気に辟易として早々に外に出る。

この洞窟に一般の観光客は入ることがないらしい。すぐ隣に小さいがライムストーンの造形が美しい「ラングスケーブ」があって、ここは蝙蝠もいないのでゆっくりと乳白色の造形美を楽しめるので、そちらの方が人気である。我々もその洞窟をゆっくり見学しながら、これから始まるであろう蝙蝠の大飛翔というショーまでの時間を待つことにした。

**蝙蝠の大飛翔：**

夕方薄暗くなりかけたころを見計らって、デアケーブの入り口が見える観察台に行く。観察台は木造の粗末な作りのものだが、この時刻になると散らばっていた我々の仲間だけでなく、欧米や地元の観光客も集まってくる。５０人位で一杯になった観察台で皆が一斉にケーブと空を見ている。

やがて蝙蝠の大飛翔が始まる。奥から入り口のドームに集まった蝙蝠が一斉に空に向かって飛び立っていく。黒い点の天の川が右に左に曲がりくねりながら大空を横切っていく。160 万匹とも言われている夜行性の蝙蝠が餌を探しに集団で洞窟から出ていく姿は壮観である。

（写真 59 左）デアケーブから飛び立つ蝙蝠の大飛翔。

（写真 60 右）反対側の森に消えていく。

龍が天に昇る姿に例えられている。列を左右にうねりながら飛ぶのは猛禽類に襲われるのを避けるためだが、それでも皆についていけないで列から離れた蝙蝠は襲われる。写真 59 の左上の大きい黒点は襲っている隼の姿だ。

彼らは夕方ここを出て、周囲の森で蚊を餌にする。朝方には帰って来ては入り口で糞をして、また自分の場所に戻って天井からぶら下って寝る。そういう生活スタイルになっている。洞窟のドームに溜まった糞の山は蝙蝠のもので、蚊の目玉は消化されずに残っているそうだ。高級中国料理に珍味として、蚊の目玉があるのは、こういう場所で採集しているのかもしれない。そう思うと食べてみる気にはなら

ない。

あたりが暗くなってもこの大飛翔ショーは終わらない。一時間近く見学したが、終わりになりそうもない。最後まで見るのはあきらめて、暗いなかをヘッドランプの明かりを頼りに熱帯雨林の道を宿舎に戻る。これがこの公園のハイライトである。この公園内には他にもいろんな洞窟や熱帯雨林の中で水浴びの出来る川の淵等あるがこれだけは皆が必ず訪れている。

**プナン族の村：**

洞窟見学で往復したメリナウ川沿いに先住民族プナン族の村があるというので立ち寄った。川沿いに時々粗末な桟橋がある。この辺の交通機関は船しかない。桟橋があれば、そこに村がある。その一つにプナン族が住んでいるというので、レンジャーに案内してもらった。

（写真 61 左）桟橋で遊んでいる現地の子供達。

プナン族はボルネオの先住民族の中でも最も原始的な生活をしていると言われている。狩猟民族で定住する家を持たない。毒を付けた吹き矢で猿や鳥を狩猟し、丸太と木の葉で作った仮屋を作りながら家族で熱帯雨林の中を移動している非定住の民族と聞いていた。ところがここの村は中央にサッカー場ほどの広場があって、その周囲に木造の住宅が並んでいる。あきらかに定住している村だ。本来は腰に布を巻いただけの裸族なはずなのに衣服もきている。

現在マレーシア政府は先住民族の定住化政策をとっている。その一環としてここにプナン族の村が建設されていたものと思われる。この定住化政策は他の民族にも適応されている。人口の把握からも、教育、環境面と労働人口が都市に集中していることから、都市の近くに定住させる方針をとっていて、今では昔ながらの彼らの部落と生活スタイルを見学するのが困難になっている。

村に入ると数人の女性が屋台でおみやげの手芸品を売っているが男たちは居ない。レンジャーに聞くと男たちはいまだに森を移動しての狩猟生活をおくっているらしい。彼らは前人未踏と言われている熱帯雨林の中も熟知していて、飛行機事故で行方不明になり、上空からヘリで探してもわからないのを彼らに探してもらったエピソードが新聞に載るようだ。まさに森のスペシャリストである。森の中で食料になる植物や薬効のある植物に詳しく代々受け継がれているらしいが、いつまでそれが続くか。
観光を通して、近代化の波が確実に押し寄せてきている。

（写真 62 左）プナン族の村の老夫婦。
村長かもしれない。他に男の姿は見られない。

～～～～～～～～～～～

（写真 63）赤い甲虫